



〒892-0841
鹿兒島市照国町13-42
カトリック鹿兒島司教区
電話099 (226) 5100
振込口座 02030-2-8359
編集発行 教区広報部
1部60円年間千共1100円



温かみのある小教区へ 班制度の共通理解を図る 意見交換会でザビエル教会

2月19日(日)、9時のミサ後に「班制度についての意見交換会」が行われました。郡山司教様は平成27年教区報1月号で「班制度を活用し温かみのある共同体へ」と呼び掛けられていま

「出席人数が少ない」「班長の負担が大い」「などの課題も寄せられました。このアンケートのまとめは秋に信徒へ配付されました。今回の「意見交換会」はこれを受けて文字通り様々な意見を交換して、小教区の皆の理解を深めることが目的でした。

その後、自由にご意見をいただきました。班会での情報伝達の課題、班会は信仰的な交わりを深める場ではないか、小教区での諸活動が班会と重複して出席できない、年に1回でも教会学校の親子も出席してはどうか、以前作成した冊子があるのではなどの意見が寄せられました。

最後に主任司祭の竹山昭神父様から「班組織を生かすために班会がある。班会に出席できないから班組織がまったくだめになるという事ではない。病气などで教会へ来られない方へ手を差し伸べることも班の働きの一つである」とご意見をいただきました。

出席者からは「班活動の現状を知る良い機会となった。様々な生の意見が聞けて良かった」などの感想が寄せられました。信徒数が減少し高齢化する現在、班制度の意義や課題について認識を共有する機会となりました。この取り組みを支持してくださいと神様に感謝します。(報告・ザビエル教会信徒総代・櫻井 真)

設置したい「子ども食堂」

教区司祭 山口好信神父

まだ始めてもいないのですが、教区報担当者から勧めをいただきましたので、あえて書かせていただきます。

今から10年ほど前から、他の家庭より貧しいために生きづらい家庭が増えてきました。2010年には「なくそう!子どもの貧困」という全国ネットワークができました。そして2013年には「子どもの貧困対策法」ができました。子どもの6人に1人は貧しいため、他の子と同じような食事や教育を受けることが

できない子が、6人に1人の割合でいるということです。今、全国に300以上の子ども食堂ができています。開催主体は個人や有志の団体が自宅や公共の場所などで、またお寺や神社、教会などで開いています。もつとたくさん必要だということです。「広がれ、子ども食堂の輪」全国ツアーまでなされています。

北九州市などでは自治体で子ども食堂を開設するようですし、全国各地の児童館でも開設しています。佐賀県武雄市では市役所に

「こどもの貧困対策課」を新設し、東京のいくつかの区も「こどもの貧困対策担当部」を設けています。岩波書店から刊行されている雑誌「世界」2月号は「子ども食堂」の特集を組んでいて、その中のある論文によると、約50の自治体で学校給食費を無償化しており、約220の自治体は給食費の保護者負担軽減をおこなっているという現状です。

某大学教授(児童福祉)は「市民が手弁当で子ども食堂に取り組んできたが、本来は行政の役割。将来は小学校区に一つ設けるべきだ」と言っています。貧しさゆえに、義務教育の場を正常に保つことが難しくなっているというところ、郡山司教さんの「やったらいい」との同意があり、また信徒のYさんやTさんの助力ならぬ「主力」を得て、

唐湊の司教館を借りて子ども食堂を開くことになりました。今、調理してくださる方などを求めて、いくつかの教会を巡回させていただいています。また地域の方々の協力をいただきたらと思っています。4月か5月から月一回、最終土曜日に開催したいと思っています。皆さんに野菜、その他の支援のお願いをすることになると思いますので、よろしくお願いたします。

とりあえず、支援してくださる方は、山口へ連絡いただければ幸いです。TEL 090(5293)4248、メールアドレス yamazakura@po5.synapse.ne.jp



ザビエル教会で説明する山口好信神父

4月9日は世界青年の日

1984年、「あがないの特別聖年」に、聖ヨハネ・パウロ二世教皇は大十字架(3・8m)を聖ペトロ大聖堂の祭壇脇に設置しました。そして特別聖年の結びに、それを「主イエスの人類への愛のしるし」として聖年たちに託し、キリストこそが救いであることを世界に告げるように願いました。以来、この十字架は教皇の志を継いだ青年たちの巡礼のシンボルとなり、諸国を旅することになります。国連が定めた国際青年年の1985年、受難の主日に、青年たちはこの十字架とともに教皇のもとに集まりました。教皇はこの年、受難の主日を毎年「世界青年の日」として祝うように定め、2~3年に一度は、世界中の青年が教皇と出会うワールドユースデー(WYD)が開催されるようになりました。2019年には、中米パナマでWYDが開催されます。

修道会人事

▼大松正弘神父(レデンプートル会・川内教会主任)は、母間教会及び和泊教会助任司祭
▼T・メニツヒ神父(レデンプートル会・母間教会及び和泊教会助任)は、川内教会主任司祭
※着任はいずれも4月1日付け。

でもらい、敷地を測量するなどした上で、アドバイスをもらいながら納骨堂の規模やデザインをイメージしました。今後は、基礎設計をもとに検討を重ね、アンケート調査などを踏まえた上で、価格や規模を決定していく予定です。

建設予定地で検討

納骨堂委員会

3月12日(日)午後、納骨堂の11月完成を計画している納骨堂委員会のメンバーたちは、建設予定地のカトリック唐湊墓地で意見交換しました。現地にはオブザーバーとして石材業者にも駆けつけ



田代神学生を 助祭・司祭候補者に認定

教区の大神学生・田代竜之さんが3月12日(日)、ザビエル教会でのミサの中



の式典で「助祭・司祭候補者」の認定を受けた。奄美大島は赤木名出身の田代神学生は、地元の小学校卒業後、長崎カトリック神学院、長崎コレジオと進み、日本カトリック神学院東京キャンパスで哲学を学んだ。助祭・司祭候補者に認定された田代さんは今後、日本カトリック神学院福岡キャンパスで神学を学び、司祭への道を歩み続けて行く。

諏訪勝郎神学生の「僕の長崎への道」

日本二十六聖人の道を歩いて

(7)

2月29日(月)片上一岡山:約29km

「一つお願いがあります。わたくしを処刑する役人に、死刑の二日前に御ミサに与り御聖体を拝領する許可を、お願いできないでしょうか。」

片上で、日本二十六聖人の一人、フランシスコ会司祭ペトロ・バプチスタの書いた書簡の一節。同じくイェズス会修道士パウロ三木も、「わたくしは二十四人は、全員が同じ望みを抱いています。磔刑の前にもう一度、ミサに与り御聖体を拝領したいのです」と片上から書き送っている。

(いずれもフロイス『日本二十六聖人殉教記』より) かれらの信仰を想うと恥じ入るばかり。きのう、日曜日にもかかわらず、上郡・片上間に教会のないのをよいことにミサをサボった。羞恥はあっても罪悪感に乏しいのが、「信仰の薄き者よ」とわれながら情け



大内神社

このようにして僕たちの生活にモノが届く。それはそれで尊い。けれど、何か僕たちが自ら賄い

午前9時、雨の中、片上を後に。葛坂峠を越える。伊部からの旧道は、左右に備前焼の店が軒を連ね、風情のある佇まい。店舗が尽きるころ、雨が止む。

大内神社・香登一里塚の手前でのこと。向こうから走ってきた軽トラが僕の正面で停車。「差し入れ!」と弁当を手渡される。日さんだ。

日さんは岡山教会の信徒。五島の生まれ。鶴島巡礼のリーダーを務める。日本二十六聖人の道も、すでに京都から山口までを踏破。あとは九州を残すのみという。

「無理せんと行きや」と見送ってくれる。きのう、国道を歩いて、所々に設けられた退避エリアに大型長距離輸送車が停車しているのをよく見た。運転手が仮眠をとっているよう。なかには、フロントガラスに覆いをか

得るものを自ら賄うなら、このような重労働は軽減されるだろう。おそらく車両中心の道路整備もまたない。ここでも、僕たちがいかにモノに頼っているかを見る。物資に限らない、それを運搬する機器をはじめ、僕たちの周囲はモノに溢れている。

自らの脚を道具に、自らの意思と心肺機能を発動機として歩む僕のすがたは、傍目にも愚か、滑稽の極みだろう。だが、僕たちが自らに備わった肉体と心とをいかにはたらかせていないかを知る機会にはなるのである。

備前大橋を渡る。風が強い。背負ったリュックの重みがなければ回転しそう。足許も覚束ない。天気予報ではきょう、風速30mを超えるところもあるとのこと。風速30mとは、人間がふつうに立つてはいられない強風だ。藤井宿に入り、左右に家

屋が軒を連ねる狭い旧道を歩くようになって、風も遮られてか、ようやく前傾姿勢も和らぐ。しかし穴甘を過ぎるとまた、強い逆風。百間川、旭川と二つの大きな河川を越えるまで、強い向かい風だった。

3月1日岡山一川辺(倉敷):約26km

午前6時30分、ミサ。午前9時、ロイさんに見送られ、岡山教会を発つ。きのうとは打って変わって穏やかな快晴。朝の日なた道が心地良い。

備前国醍醐山成願院本坊あたりから旧道へ。それでも自動車の往來は激しい。足守川を渡ってから、旧道は鄙びた農村地域を抜けていく。一旦国道270号線に出、ふたたび旧道に戻ると、目前に備中国分寺の五重塔が現われた。備中国分寺は741年、創建。聖武天皇の詔により

俳句

鹿兒島純心 川上 和
メサイヤの「主に立ち返れ」と春の声
モクレンや一雨ごとに輪を広げ
塵の身に灰をいただき四句節
吉野教会 徳永ノブ子
プランターの萎れるねぎの復活す
菜飯炊く夕餉の膳のかぐわしや
三寒の一枚重ね外出かな

短歌

鴨池教会 前田 儀子
妹と行きたかりしゴルゴダの丘への径もおもふのみに過ぎ
祈るごとよき歌になれと寄る窓に夜更けの雲より満月生るる
アヴマリアの音階はらむオルゴールマリア像の振り巻く夜
人と成りもだえ苦しみゲッセマニ御旨の杯受け給う愛
始良教会 川口 節子
鹿兒島純心 川上 和
殉するに長き旅路を貫きつマニラに立てし右近の栄光



備中国分寺五重塔

日本各地に建立された国分寺の一つ。廃寺の時期もあったが、再興。南北朝時代に焼失した七重塔に替えて弘化年間(1844-47年)、五重塔を再建した。その仏閣は長閑な田園風景のなか、自然の一部でもあるかのようにならぬ。信仰の有無にかかわらず、日本人の心に響く、あ

て、あれは異国情緒をそそるに過ぎない。日本人の誰彼なく、理屈抜きで、伝わる「こころ」はそこにな

あるいは苦行を否定、牛乳粥を飲み、美しい林の中、無花果の樹のもとで大悟。あるいはその最期、弟子たちは集い、沙羅双樹は散華、象も泣いた蛇も泣いたという。

KABAYAN SEKSYON

Hindi Dapat Ibuklod ang mga Dukha

Nang magsalita si Papa Francisco sa Palasyo ng Malakanyang noong Enero 16, 2015 sinabi niya na layon sa kanyang pagbisita ay "para ipadama ko ang aking pagiging malapit sa mga minamahal kong mga kapatid na dumanas ng pagdurusa, kawalan at pagkawasak na dulot ng bagyong Yolanda."

Sa pagbibigay-diin sa isang repormang panlipunan na tunay na maglilingkod sa mga dukha, ipinaalala ni Papa Francisco: "Sa pagrereporma ng mga balangkas ng lipunan na nagpapanatili sa kahirapan at pagbukod sa mga dukha, una sa lahat, ay nangangailangan ng pagbabago ng isipan at puso."

Ipinagpatuloy ng Santo Papa: "Hiniling ng mga Obispo ng Pilipinas na ang taong ito ay mailaan bilang 'Taon ng mga Dukha.' Umaasa ako na ang propetikong panawagang ito ay magsisilbing hamon para sa lahat ng antas ng lipunan, na talikdan ang lahat ng uri ng korupsiyon na naglilihis ng mga tulong palayo sa mga dukha. Nawa'y maging inspirasyon din ito tungo sa mga sama-samang pagkilos para tiyak na kabilang ang bawat lalaki at babae at bata sa buhay ng pamayanan."

Isang malalim na pagbabalik-loob ang kailangan, upang ang mga lider political "ay maipasa sa darating na mga salinlahi ang isang lipunan na may tunay na katarungan, pakikipagkapatiran at kapayaan."

Ang mga pahayag na ito ng ating Papa Francisco, sana ay maging ganap at matupad ng ating mga lider ng simbahan Katoliko, na sa pamumuno ng mga Obispo at mga kaparian. Dapat na mabigyan pansin ang kalagayan ng mga kapatid sa pananampalatayang Kristiyano Katoliko ang mga dukha. Hindi dapat sila bale-walain, bagkus ay palakasin ang kamilang mga pananampalataya at pag-asa sa Diyos na punong-puno ng habag at pagmamahal sa mga dukha. Lahat sana tayo ay magkaisa sa pagtataguyod ng kapayapaan.

Katesismo sa Taon ng mga Dukha (Fr.Dino Orolfo)

たしかに日本人もヨーロッパに行けば教会を愛で、感ずることはある。だがその建築美なり、祭壇画やステンドグラスなどの美術工芸品の美なりに感心してのことだ。日本の寺を詣で、その建築美云々以前に、思わず手を合わせるというよ

たしかに日本人もヨーロッパに行けば教会を愛で、感ずることはある。だがその建築美なり、祭壇画やステンドグラスなどの美術工芸品の美なりに感心してのことだ。日本の寺を詣で、その建築美云々以前に、思わず手を合わせるというよ

フィリピンからのメッセージ学ぶ

谷山教会で2017年世界祈祷集会

例年、四旬節の第1金曜日に開催される世界祈祷集会、今年は、3月3日(金) 谷山教会で開催された。市内のプロテスタント諸教会、カトリック諸教会など100人余りの人々が集まり、祈りをささげた。

今年のテーマは、フィリピンからのメッセージ「私はあなたに何も不当な事はしていない」というイエスキリストの言葉で、読まれた福音書は「ぶどう園の労働者の例え」でした。

頭島主任司祭は、説教の



和やかな雰囲気にもまれた茶話会

中で、「イエスキリストは、最後に来た者にも、最初から頑張った者と同じように支払いたいと言われた。また、そこにいた人々にも声をかけられ、ぶどう園に誘い、神の栄誉を授けて下さった。私たちが貧しい人、苦しむ人、悲しむ人の傍に駆け寄り声をかけ、世を照らす光となりましょう」と話された。

最後にフィリピンの方9人が「奉納の歌 SARA MA SAIYO」を熱唱され、その後は、田代俊子さんの司会で茶話会が催された。

和やかな空気にもまれたお茶やコーヒー、手作りケーキなど、民族衣装を身に付けてフィリピンの方々の熱いメッセージを聞くことができた。そして手作りのデザートやゼリーを振舞われ、おもてなしに感服した。

フィリピン人のデーン神父様は「壁を作らず、心を開き出向いて行きなさい」と話され、まさ

「カトリック北薩信徒大会」のお知らせ

日時：5月21日(日) 午後12時30分から受付開始(午後4時まで)

場所：大口明光学園(体育館)

テーマ：「いのり」主よ、わたしたちにも祈りを教えてください。

講師：ホセ・デルコス先生(ラ・サール学園理事長)

*なお、ミサの中では堅信式も行われます。

に今日は、短い時間ではあったが、各教会の方々と心を開き、お互い認め合う事ができた日だった。

(報告 谷山教会レポーター)

「短信」

▼子ども食堂説明会
3月12日(日) ザビエル教会ではミサ後、教会一階ホールで「唐湊の司教館を利用し、子ども食堂を開きたい」という計画を有志代表の山口好信神父が説明した。説明会には40人余りの信徒が集まり、山口神父の訴えを熱心に聞き、どん

なボランティアができるのかなど積極的な質問が出された。山口神父は、3月19日には玉里教会で同様の説明会を開催した。

▼古田町教会で堅信式
2月26日(日) 古田町教



十字架の道行き ザビエル教会学校

四旬節に入ったある日曜日、主日のミサを終えた子どもたちが「十字架の道行き」に挑んだ。教会学校のリーダーから説明を受けた子どもたちは、長い祈りでの苦しみを体験すると



会(松永正男神父主任司祭)で堅信式があり、中学生8人と大人2人の計10人が郡山司教からその恵みに浴した。ミサ後は、祝賀会があり、交流のひと時が持たれた。

もに「イエスキリストからの許し」を熱心に願っていた。

司教執務室便り

神がくださるハードル



先月十二日、主日のミサの中で助祭・司祭候補者認定式なるものがあつた。神学課程に進む神学生が受ける式で、司祭職に向けての大きな一歩。ボクらの時は五人が祭壇前に横一列に並び、「司祭を志す者は一歩前に出なさい」という呼びかけに、一人ずつ、「アドゥスム(私はここにおります)」と答えて一歩前に踏み出すのが習わしだった。ハードルを一つ越えたという実感に心が震えたものだ。新しくなった典礼では名前を呼ばれて「ハイ」と答えるだけになった。

その後、司祭になるまでに守門、跋魔師、侍祭、副助祭、そして助祭といくつもの式があつて、沢山のハードルを越えながら一歩ずつ司祭職に近づいていく緊張感を味わうことができた。副助祭になった時に五冊もの分厚いラテン語の教会の祈りが渡され、思わず「大変そう」とつぶやいたものだ。しかし、司祭職がいよいよ射程距離

に入ったという実感を持ったのも本当だった。刷新された典礼では助祭だけが残り他は廃止された。

考えてみると、司祭にかぎらず、信仰の道は一つひとつの困難というハードルを越えながら神様が示されるゴールに向かっていくようなもの。どんなハードルにしても「神様がくださった」という思いがなければただのグチのもとでしかないが、「神様のトレーニングメニュー」と思うなら力が湧くから不思議だ。

カトリック新聞三月十二日号に「キリスト教に出会って生きやすくなった」という感想を述べた青年が紹介されていたが、神さまとつながれば、自分を不自由にしているものが見えてくるからそれだけ身軽になるのはある意味当然。

ハードルを一つ飛び越える度に自分に死ぬことを体験し、新しい自分というゴールに近づく。つまり、主と共に死と復活を体験しながら歩むのが信者の道。そして、これが四旬節の本当の姿。神さまからのトレーニングメニューを生き生きとこなす日々であるよう祈りたい。主の復活、皆さんの復活おめでとう。

会と催し (4月)

- 2日(日) 四旬節第5主日
- 4日(火) 中野裕明神父叙階記念(1978年)
- 6日(木) レヒナ神父命日(2015年)
- 7日(金) 聖体礼拝・カテドラル・6時30分
- 8日(土) 成相明人神父霊名(聖ラ・サール)
- 9日(日) 賛美の集い・教区本部・14時
- 11日(火) 四旬節第6主日(枝の主日)
- 12日(水) 世界青年の日
- 13日(木) 司祭評議会・教区本部・10時
- 14日(金) コンペンツス・教区本部・10時
- 15日(土) 聖香油ミサ・カテドラル・11時30分
- 16日(日) 聖金曜日(主の晩さん)
- 18日(火) 聖地のための献金
- 19日(水) 14世紀中ごろ、教皇クレメンス6世は、パレスチナ各地の巡礼所とヨーロッパからの巡礼者保護をフランシスコ会に委託しました。その後、政情不安定な聖地で苦勞していった修道士たちを支えるために行われるようになった献金は、いつのころからか主の受難と死を記念する聖金曜日にさげられるようになりました。そして教皇レオ13世は1887年、カトリック教会すべての小教区にこの聖地のための献金を命じました。
- 20日(木) 全世界の教会からローマ教皇庁に集められる献金は、現在、イスラエル、ヨルダン、キプロス、パレスチナ自治区内にある数多くの巡礼所や聖堂などの維持管理に充てられるほか、聖地の貧しい兄弟のための福祉施設や教育施設の運営、奨学金や生活保護などのために使われています。
- 21日(金) 復活の主日
- 22日(土) 聖土曜日
- 23日(日) 松森孝郎神父叙階記念(1971年)
- 24日(月) 教区巡礼委員会・教区本部・19時
- 25日(火) 聖霊セミナー・教区本部・9時
- 26日(水) アン神父叙階記念(2006年)
- 27日(木) 復活節第2主日(神のいつくしみの主日)
- 28日(金) 復活節第3主日
- 29日(土) オリープの会・教区本部・14時
- 30日(日) 聖マルコ福音記者
- 31日(月) マイエル神父命日(1978年)
- 1日(火) 聖霊セミナー・教区本部・9時
- 2日(水) ハンマ神父叙階記念(1963年)
- 3日(木) アッシュヤー神父叙階記念(1968年)
- 4日(金) 萩原義幸神父叙階記念(2010年)

祈りの意向

【祈祷の使徒会】
世界共通 若者たち
日本の教会 新入生・新入社員への励まし

「正義と平和協議会全国会議」報告

終身助祭(加世田教会) 川口 茂

2月24日から26日まで、東京で開かれた2017年度「日本カトリック正義と平和協議会・全国会議」に参加した。テーマは「社会の中で福音を生きる」信仰をかせるために」である。主な内容は香山リカさん(立教大学、精神科医)の講演、勝谷担当司教の講話、そして分科会は教区担当者

の山下和実さんが「原発」、私は「改憲」のグループに参加しました。ほかには「沖繩」がありました。

ど不思議なことであり、ここでは《否認》現象が起きている。普遍的で大切なものである信仰、聖書で神の愛を信じて、知恵をいただき日々の生活を営んでいるキリスト者には、なぜなのか：考えさせられる問題だ。

(4)「正義」と「真理」はどこにあるのか、人権侵害問題ではどうしてこの問題が起きているのか、大事なものは何か、それは時代の変化なのか、相対的な市場原理が働いているのではないかな等考えさせられる。

平和は大事、差別はいけない：この点については理由なんてない、これは揺るぎない正義であり普遍的なものである。神の真理が分かるようになる。今どきの人々には社会問題について、「自己愛」が強くなっている、同一視、投影、否認などをすると人々が増えている。

II 感想
会場のキリスト者の感情から生まれることば、感覚から生まれることば、感動することばなどから、物の見方、考え方が共につどい話し合う中で私の全身に伝わって来てカトリック信者がとても魅力的に思えました。

原発のこと、憲法のこと、沖繩の基地のことについて福音の視点からの分かち合いが多くの小教区で話題になるとより豊かな教会になるのではないだろうか。福音を信じて日々を生きている皆さんがより生き

I 香山リカさんの講演

(1)「改憲」を心理学的に読み解くと、この問題に対する人々の反応には①この改憲の問題に関わるいろいろな事実を受け止める大変さを思うと、出来ることもあるがそうでないこともある。②改正すること希望がもてる。③勝ち馬に乗りたくないなどがある。

日本のカトリック司教団は、なぜ「原子力発電」の撤廃を全世界に呼びかけたのか。(2016年11月11日、司教団メッセー

じ) 原発の是非については、様々な意見があります。教会の中にも、原発の必要性を主張される方がいます。そうした中で、日本

III 追記
正義と平和委員会の目的は、①すべての神の民が社会問題に対して持っている責任を自覚すること、②現代社会が教会に与えている社会的責任をすべての信徒に理解させること、③その人々が自分の力で立ち上が

れるようにすることである。1967年に教皇パウロ6世がお作りになったこの委員会は日本では最初に白柳大司教、次に相馬司教が後を継いで名称を「日本カトリック正義と平和協議会」とされた。

「平和のために働く人は幸せに」・相馬信夫司教 著(参照)

KJP (鹿児島正義と平和協議会) 通信

資料として「今こそ原発の廃止を」という本を出版したのは、福島事故以降も原発の稼働を続けていくことへの危機感を強く感じたからです。福島の悲劇を繰り返してはならないという強い決意の表れです。鹿児島には川内原発があり、近頃は活断層(中央構造線)もあり、桜島や始良カルデラもあります。いつ大地震・大噴火が起こるか分かりません。自然災害による被害以上に、原発のリスクは計り知れないものです。司教団メッセー

「今こそ」という強い口調で訴えるのは、今止めなければ危険は増幅し、後の世代に「負の遺産」を残すことになるからです。私たちにできることは何でしょう。まず司教団メッセーと参考資料を読み、理解することです。先日の「正義と平和協議会全国会議」で信徒にメッセー

先日、日本カトリック司教団から「いのちへのまなざし」(増補新版)が出版されました(2017年3月17日)。その中で、いのちを脅かすもの一つとして「原子力発電」が取り上げられています。簡潔にまとめられており、読むことをお勧めします。

定例会お知らせ
日時 4月22日(土) 13時~15時
場所 教区本部
① 主の祈り
② 情報交換
③ 「今こそ原発の廃止を」(カトリック中央協議会発行)を読みながら、原発の問題点を考える。
連絡先 山下和美 TEL 080(1704)8315

(3)「原発」は何かのしるしなのではないか。人間が傲慢な事をした。原発は廃棄物の最終処理が人間にはコントロールできないものである。人間はこの領域に立ち入ってはいけない。再稼働する決断は、人々

その事を考えるたくないな

原発のこと、憲法のこと、沖繩の基地のことについて福音の視点からの分かち合いが多くの小教区で話題になるとより豊かな教会になるのではないだろうか。福音を信じて日々を生き



原発のこと、憲法のこと、沖繩の基地のことについて福音の視点からの分かち合いが多くの小教区で話題になるとより豊かな教会になるのではないだろうか。福音を信じて日々を生き

カトリック通信講座「キリスト教」とは

すべての人の救い主イエス・キリストの教えと生涯を中心に、日本の文化や宗教観に照らしながらキリスト教の概要をわかりやすく解説します。信仰体験などのコラムも充実しております。初めてキリスト教に触れる方にもおすすめです。詳細は当研究所ホームページをご参照ください。URL: <http://www.oriens.or.jp>

<お申込み>
郵便局より、振り込み用紙の通信欄に「キリスト教とは」とご明記のうえ、受講料(4800円)をお振り込みください。
振替口座番号: 00170-2-84745 加入者名: オリエンズ宗教研究所
入金確認後、教材(テキスト・解答はがき)をお送りします。

<お問い合わせ>
オリエンズ宗教研究所「カトリック通信講座」
Tel: 03-3322-7601
Fax: 03-3325-5322

子どもたちとともに主日の福音を「こじか」2017年度のご案内

子どもたちに福音を味わう1週間を
わかりやすいと好評の主日の福音解説を中心に、多彩な記事でイエスさまのまなざしを伝える「こじか」。受洗、初聖体のお祝いやお孫さんへのプレゼントとしてもご好評いただいています。

- ・毎週日曜日発行(年44週) B5判・16頁(ふりがなつき)
- ・定価65円+税(送料別)*15部以上のご注文は55円+税
- ・国内年間定期購読1部4100円/2部7400円(税・送料込、2部の価格は同じ発送先の場合)

※お申し込み、お問い合わせ、見本誌請求は下記にどうぞ!

オリエンズ宗教研究所 〒156-0043 東京都世田谷区松原2-28-5
Tel: 03-3322-7601 Fax: 03-3325-5322
URL: <http://www.oriens.or.jp>